



紳士同盟 ふたたび

小林信彦



新潮社

紳士同盟ふたたび



定価 七八〇円

印刷 昭和五十九年九月十日

発行 昭和五十九年九月十五日

著者 小林信彦(こばやしのぶひこ)

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒東京都新宿区矢来町七一 振替東京四一八〇八

電話 業務部 03(266)5111 編集部 (266)5411

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社

©1984 Nobuhiko Kobayashi, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-331810-4 C0093

目次

プロローグ	アトランティック・シテイ	5
第一章	ダブルシヨック	13
第二章	のるかそるか	49
第三章	第一戦	71
第四章	第二戦	107
第五章	ニューヨークの秋	136
第六章	贗作の光景	158
第七章	第三戦	180
エピローグ	延長戦	208

装 装
画 幀
河 平
村 野
要 甲
助 賀

紳士同盟ふたたび

プロローグ アトランティック・シテイ

海の上を真紅のセスナ機が飛んでいる。

それだけならば、べつに珍しい風景ではない。

しかし――。

セスナ機のうしろにへ女性とつき合いたい方は当方へ……という広告の英文がひらめいており、ついでに電話番号もひらめいているのは珍しい眺めである。少くとも、日本人にとつては……。

大西洋ぞいの板の遊歩道を往来する人々の中に、二人の日本人がいた。背が低いほうの男はどうやらカメラマンらしく、海に向けてすばやくシャッターを切った。

「じつに明るい……」

サングラスをかけた背の高いほうの男は海からの風を大きく吸い込んで、

「アメリカ人はこの海が汚れているというけれど、日本の海にくらべればましですね」

と呟いた。

「あなたは、よく、ここに来るのですか」

カメラマンがたずねる。

「ニューヨークにきた時はね。車で三時間ですから」

三十代らしい、サングラスの男は上着を脱いで、右手の人さし指にひっかける。

「暑いですなあ、今日は」

「私は、明後日、日本に帰るのですが……東京もまだ暑いだろうなあ」

と、カメラマンはぼやいた。

「儲かりましたか？」

「私はスロット・マシンばかりで」

「しかし、スロット・マシンこそカジノの重要な財源なのですよ」と男は説明する。「よく調べると、一つのカジノに何台か、やたらにコインを吐き出す台があるはずで。客のコインを吸い取る一方ではいけないという法令があるらしい」

「ゆうべ、一台見つめました」

カメラマンが白い歯を見せる。

「少し儲けたので、今朝、また行ってみたのです。ところが、黒人の小母ちゃんがりひとり、その台に貼りついて、動かない。二時間待っても、動かないので、諦めました」

「健全な遊び方ですな」

背の高い男は冷やかすように言った。そして、ボードウォークぞいにならぶ豪華なホテル群を眺めた。

「わずか三年で、こんなに栄えた。ブーム・タウンだな」

三年まえ、一九八〇年秋のアトランティック・シティは、町も海岸も閑散としていた。カジノを持つホテルは、歴史のあるリゾート・インターナショナルのほかに、一つか二つしかなかったと記憶する。あの当時、だれがこの繁栄を予測できただろうか。

「ラス・ヴェガスが大恐慌だそうですね」

カメラマンがしたり顔に言う。

「カジノの客が三割減ったとか」

「ラス・ヴェガスまで行く必要がなくなったからな。東部のギャンブル好きは、みんな、この町にくるんです」

アトランティック・シティは長い歴史を持つ保養地である。一八六〇年にはすでにボードウォークがあり、四十フィートの幅を持つ現在のボードウォークは一八九六年に完成している。日本でいえば、戦前の鎌倉といった感じのリゾートで、海水浴、ヨット、見世物小屋ありの賑わいは、狂乱の一九二〇年代に頂点に達した。ニューヨークの紳士淑女にとつて、アトランティック・シティの名がステータスを感じさせたのは、この時期だろう。

三〇年代、四〇年代と、第二次大戦をくぐり抜けて、アトランティック・シティは衰亡に向う。死にかけた町アトランティック・シティを救うために、ニュージャージー州では、もう一度、町をヘスパー・リゾートにしようと計画した。

金をかき集めるのに確実なものは、なんというかと、

カジノである。失業者が溢れ、ゴースト・タウン寸前まで行つたこの町にかぎり、カジノ経営が許されることになった。一九七六年、一般投票によつて州法が変えられたのである。

一九八〇年、数少ないホテルのカジノには大衆が溢れ、カジノが足りなくなつた。

一九八三年、町はよみがえり、カジノの建設は、なおも進みつつある……。

「ホテルに戻りませんか」

背の高い男は、ヘゴールデン・ナギットの方に身体を向けた。

「めしを食いましょうや。ゆうべ、ツイていたので、中華料理ぐらい、ご馳走できますよ」

「そりや、どうも」

カメラマンはいまいに答える。同じ日本人というだけで、ホテルの廊下で声をかけ、そのまま、いっしょに遊歩道に出てきてしまったのだ。昼食をオゴられて、いいものかどうか。

「ツイてたのですか？」

「クラブです」

サイコロを振る手つきをした男は歩きだした。

「ブーム・タウン、か。けつこうな話だなあ……」

カメラマンは羨しそうに言う。

「でも、ギャンブルがこれだけ栄えると、売春婦なんかも増えるでしょうな。それに、マフィアとか、あいつた組織がなだれ込んでくるだろうし……」

相手は答えなかった。

二人は、従業員たちがフランク・シナトラの顔のバッジをつけているホテル、ヘゴールデン・ナギットのアに吸い込まれた。

こうしたホテルにしては、という条件つきであるが、けつこうな中華料理で腹が一杯になった男は、カメラマンとバーで軽く飲んだ。

もう一度、カジノへ行くというカメラマンとはエレベーターの前で別れた。さすがに疲れが出たのだ。

八階の部屋に戻る。

ラス・ヴェガスから進出してきたこのホテルは、金ピカの成金趣味で統一されている。彼は黒ずくめの洗面所に入り、ホテルのマーク入りの茶色い石鹸で顔を洗い、ホテルのネーム入りの茶色いタオルで顔と手を拭いた。ひと眠りしてから、カジノへ行くつもりだった。もつと

勝ちつづけなければならぬ事情があるのだ……。

洗面所を出て、ベッドに近づこうとした男は、そのまま凍りついたようになった。

一度会ったことがある、ラテン系の小柄な男が窓ぎわの椅子に腰かけ、靴をテーブルにのせていた。

「アトランティック・シティへようこそ」

グリースで髪をかためた男はイタリア訛りの強い英語で言い、片手をあげた。

日本人は答えない。

「まあ、すわれ。おまえは良い度胸だよ。カミカゼ・スピリットってやつかな」

イタリア系の男は早口で言い、もうひとつの椅子を指さした。

「よく戻ってきた。とりあえず、ようこそと言っておくれよ」

「なにか、飲む？」

日本人は弱々しくたずねた。

「ルーム・サービスで取り寄せよう」

「おれは酒を飲まねえ」と小柄な男はネクタイの位置をなおしながら首を横に振った。「ビールだってペリエで割ってるぐらいだ。……それよりも、金だ。おれを金を

とりかえしにきたロボットだと思ってくれ」

小柄な男は立ち上り、立ち尽している日本人を見上げた。

「いいか。おまえはトンズラした。それだけでも、殺されて、当然なんだ。しかも、おれたちを騙した。おまえは、どうやら、メイド・イン・ジャパンの詐欺師らしいな」

「まあ、きいてくれ」

「やかましい」

小柄な男は、いきなり、テーブルを蹴倒した。

「安心しろ。このホテルの器物をこわすことはしねえ。

オールド・ブルー・アイズ（シナトラ）が好まねえだろうしな。……さ、財布を出しな。早くしろ」

苛々した男は、日本人の上着の内ポケットから黒革の財布を抜いて、中身を数え始めた。

「……五千ドルか。こいつは貰っておくれ」

「待ってくれ。このホテルの支払いが……」

「舐めるな！ 支払いはクレジット・カードじゃねえか。フロントでカードを見せ、サインしたことから、おまえの存在がわかったのさ」

そうだったのか、と日本人は思った。チェック・イン

のさいにクレジット・カードを見せたのが、まずかったのだ。カードのデータバンクと組織が、なにかの形でつながっているのだろう。

彼は投げつけられた財布の中を見た。十ドル札が数枚残っている。

「おまえはギャンブルに憑かれた人間だ。そんな奴を、ま、んと知っているよ」

小柄な男は初めて笑った。

「さて、おれは、あと四万ドル、おまえから取り立てねえと引き下れねえ。どうするつもりだ？」

「三日待ってくれ、必ず……」

「待てねえよ」

小柄な男は大声をあげた。

「このまえも、そう言つて、日本へ逃げ帰ったじゃねえか。他の取り立て屋はともかく、このおれは騙されねえ。四万ドル返すか、冷めなくなるかだ。組織の掟というやつがあるからな」

「……わかった。ニューヨークにいる日本人に借りよう」

「四万ドル、すぐに準備できる男がいるのか？」

「日本では一流の東京テレビという会社がある。ニュー

ヨークに支局があつて、支局長のヤノという男が親友なのだ。彼にたのんでみる」

日本人は上着の内ポケットからアドレスブックを出した。

小柄な男は黙つてアドレスブックを取り上げた。

「おまえは信用できない。おれが、直接、ダイアルしよう。ヤノ——YANOだな」

男はベッドの頭の方にある金色の電話に近づいて、アドレスブックを見ながら、ダイアルをまわした。

トキーヨーTV、という交換手の声がきこえ、やがて、ヤノにつながった。

「OK、あとは、おまえがしゃべれ。ただし、英語でどうぞ」

組織の男は条件をつけた。

二時間後、サングラスをかけた日本人は、アトランティック・シティとニューヨークのほぼ中間地点にある、ハイウェイぞいのカフェテリアでコーヒーを飲んでた。

急いでニューヨークに戻り、飛行機の空席を探して、東京に帰らねば、と思う。やりかけた仕事が山ほど残つ

ているのだ。

彼は立ち上り、外に出た。ガソリン・スタンドのボーイに声をかける。ボーイはOKのサインをした。

車の鍵をあけると、中は蒸し風呂のようだった。彼は窓をあけ、車をスタートさせた。

クーラーがきいてきたので、窓をしめようとした時、背後で声がした。

「このまま、運転を続けるんだ」

小柄なイタリア系の男の声だった。

「利口な奴だと思ったがな、おまえは……」

「ど、どうやって、乗ったんだ？」

「よけいな質問をするな」

男は後部座席から乗り出して、日本人の耳朶みみたがをナイフの刃でこすった。

「妙な真似をするんじゃないぞ。まっすぐ走るんだ」

「……」

「いいか。おれたちは用心深いのだ。だから、あの電話番号をもう一度、調査シツチャした。ニューヨークの仲間が調べたら、すぐわかった。あの電話は個人の所有だった。

日本人の夫婦ものらしい。女房が交換手の声を出し、亭主がヤノの役をつとめて、四万ドル用意しておく、答

えたのだ。あの夫婦はどちらも売れない画家で、おまえに金を借りている。だから、代役を演じたのだ。——ちがうか？」

運転席の日本人は答えない。

「つまり、おまえのアドレスブックがトリックだったわけだな。初めから、組織につかまったときの準備をしてきたのだ。ギャンブルはやりたい、命は惜しいで、ああいう汚ねえ騙し方をした」

「悪かった……」

日本人はくぐもり声で詫びた。

「あと三日、時間をくれ。必ず……」

「とにかく、ニューヨークに着いてから話そう」

マンハッタンを中心地区は建築中のビルが多い。古いビルを破壊して、新しいビルを建てるのである。

古いビルをこわすのは日本でも困難な作業とされているが、タイムズ・スクエアを中心とした人通りの多い場所での破壊作業は遅々として進まぬように見える。

四十六丁目を六番街からブロードウェイ方向に曲った左側に、古いビルをこわしたあとの巨大な穴がある。地下三階はあったであろう深さで、マンハッタン島が岩で

できていることが、一見してわかる。とりこわしてはみたものの、経済的に行きづまって、新たなビルを建てそこねているのだろうか。

穴の底に、首筋を刃物で斬られた日本人の死体が転っていた。警察は麻薬患者の発作的犯行と考えた。パスポートから、日本人ツーリストの身元はすぐにわかったが、この事件を掘り下げるためには、ニューヨーク市警察はあまりにも忙しかった。

せっかくニューヨークまできていながら、これといった収穫がなかった凡庸なカメラマンは、機内に入り、シートベルトをしめると、ほっとした。これで、日本に無事かえれると安堵したのだ。

——新聞はいかがですか？

スチュアードスがやってきた。カメラマンがニューヨーク・タイムズに手をのばしたならば、一昨日、賭博の町で顔を合せた日本人の死体写真を見ることができたはずだ。食事のあとで名刺を交換しているので、名前も記憶していた。

「スポーツ紙はあるかね？」

——はい、ございます。

あくまでも凡庸な男は、一日遅れの、皺が寄ったスポーツ紙を受けとった。彼の興味は西武と巨人の動向にしかなかった。

日本人ツーリスト殺しに疑問を抱いた男がいらないわけではない。

たとえば、検屍官補がそうであって、刃物の使い方がうま過ぎる、と思ったのだ。発作的なものではなく、プロによる犯行だと判断していた。

プロといっても、いろいろな種類がある。日本人ツーリストが関係するとしたら、どのようなプロであろうか。

疑問はまだあった。その日本人は、アトランティック・シティの帰りにレンタカーに給油している。それから、レンタカーを返し……深夜に殺されている。なぜ、ホテルに帰らなかったのだろうか？ ふつう、ツーリストは、一度ホテルに戻り、それから夜の外出をするものではないだろうか。

検屍官補は、しかし、長くはこだわらなかった。とにかく、死体の数が多過ぎるのである。

この事件は、ニューヨークにおいては、すぐに忘れら

れた。

しかし、日本では――。

たんに一旅行者が殺された、だけではすまなかった。
とくに大きな迷惑をかけられる男が、ひとり、いた。

第一章 ダブルシヨック

1

東京は新宿区、四谷三丁目交差点から四丁目付近にかけて、テレビ関係の小さなプロダクションが数多く存在している。

各テレビ局に近くて、ビルの部屋代が比較的安いのが、原因であろうか。番組制作会社が数ある中でも、山椒は小粒でピリリと辛いと定評がある〈寺尾企画〉は、新宿通りに面した地味なビルの三階の一室にあった。

常識では考えられぬ事件で六本木テレビ（RTV）を〈依頼退職〉した寺尾文彦が、いかにして自分の会社をスタートさせるにいたったかという、聞くも涙、語るも涙の経緯を、作者は前作『紳士同盟』に書き記したのだ

が、あの騒ぎから丸四年たって、寺尾は業界の〈台風の目〉になっていた。

〈寺尾企画〉は、社長の寺尾を含めて全社員が五人。狭い廊下から入ってすぐの部屋には経理、営業、庶務のデスクがひしめき、その奥の社長室兼応接室に寺尾が鎮座している。北欧製のデスクに向った彼の頭上の神棚には、赤と白の大入り袋が貼られているという、なにがなにやらわからぬ眺めだ。

三台の電話がいつせいに鳴り出しても、寺尾はびくともせずに、三つの送受器を外した。

——旗本君か。すぐ、こちからかける。

——もしもし、折り返し、おかけします。

と、二つを、とりあえず、架台に戻して、

——何でしょうか？

用件をたずねた。相手は昔の上司であった。

——いや、マイったよ。二時間ドラマの主役にビートたけしを起用したと思ったのだけど、たけしの事務所が断りおった。

——なるほど……。

寺尾は無表情に答える。

——どうかね？ きみの方から口をきいて貰えんか。

——どういう役なのですか？

寺尾はききかえた。

——たけしは大久保清を演じて好評だったろ。視聴率が三十四、五パーセント、行ったのだ。

——ええ。

と寺尾は答える。彼はだいたい二十五パーセントと読んでいたので、十パーセントも予想が狂ったのだった。

——そこで、うちも企画を立てた。たけしに小平義雄をやらせようと思ったのだ。

相手は一世一代の思いつきのように言う。

——小平、ですか。

——うむ、敗戦のころの強姦魔だ。

——それはわかってます。しかし、小平といっても、

現代の視聴者は知らないと思いますか。

——いや、あれは有名な……。

——でも、約四十年前の話ですからねえ。

寺尾は遠まわしに批判した。頭の中の時計が停止したようなこうした手合いには馴れている。

——たけしを引っ張り出すのはむしろかしいと思いますよ。

——だいたい、そう、強姦犯人ばかり演じさせるわけにもいくまいが……。

——きみ、そう思うか。

——思いますよ。

——じゃ、もう少し考えてみよう。

電話が切れた。

やれやれと寺尾は思う。社長とは名ばかり、プロデューサー兼演出家として脚光を浴びている人間につきもののこんな依頼が、一日に三件はくるのだ。

ノックの音がして、経理係の日暮かおりが入ってきた。

「あの……ご相談したいことがあるのですが……」

「なんだい？」

旗本プロのダイアルをまわそうとした寺尾は、相手の顔を見た。

容貌は十人並み、小柄だがスタイルもいい。二十五歳